

研究雑誌(86) 障害児教育・動作学誌上実習(四)、
問題設定(三)、手順を自分のものに、構成単位(アジャンスマン)への変換(一八四二)。

藤井力夫

前回は、「手足を自分のものに」ということで動作学への課題についてお話ししました。障害児教育が、創始当初から「共同運動(シナジー)」の増強という観点を貫いていたことに驚かされます。しかも、足腰からのそれでした。姿勢の保持と共同運動の発達、これに関する諸資料を提示していく予定です。今回は、もう一つの課題、「手順を自分のものに」についてお話ししたいと思います。生活力をどのように形成するか。セガンは、他方で「予想できれば、応用できる」という観点をも

す。用途にあつた応用力が、生活力なのです。まずは、頭のなかでふたつに分ける。レンガの配列…一つの全体を二つに分けること。これがすべての基本です。脳の情報処理から言ってもそうです。1対2対4のレンガの配列。二つに分ける黄金比、そう言つて良いでしょう。積み木あそびは、セガンの考案です。しかも、一つでは模倣にならない。二つの積み木の置き方の関係に対して模倣する、と。本質をついた表現です。

比べ…「配列(アジャンスマン)」という用語をもちいています。類義、対比の空間的なものから誰がどうするの統辞的なものまで、「配列」であり、「生成」です。配列と生成は頭のなかで行われます。これが「変換」です。このためには、斜線を引くときに問われるような、頭のなかでの基底線の読みとり、これが前提だと言うのです。読みの練習は、頭のなかでの変換練習。韻律回路の増強…基底線の読みとりは、同時に垂線の読みとりでもあります。これはもはや、読みの世界への移行です。文字連続に対し、拍節単位で読み取っていく。まさに、頭のなかでの変換練習です。障害児教育は当初から、これが可能となる過程を対象としていました。(北海道教育大学教授)

っていました。これは、脳研究の到達段階からいっても卓見です。子どもたちを前に、実際の、どのように接近したのでしょうか。図に、前回同様、これに関係するところを概括しました。全体から部分へ。用途による教育は予測を育てる…見たままではなく、全体から部分に変換する力。セガンは、食卓を用意する課題をあげています。何と何を使って、どのように食べるのか。また、何人分、用意するのか。全体だけが明確で、組み立ては自由。自分なりの手順でよいのです。用途だけが基準で

予測できれば、応用できる

(les appliquent partout où ils croient les avoir trouvés.)

「白痴」の子どもたち・10人に対する6ヶ月間の実践
E.Séguin, 1841.10-1842.3

A. 全体から部分へ、構成単位への変換。

地面を叩くために、つるはしの両端を持つようにとか、3人分、4人分の食卓を用意するようにとか、全体から部分への手順を要する課題を命じたとしましょう。残念ながら難しい。何をどうするか、構成への手順(agencement)は、判断により精神に、巧みにより手仕事に、銘記されたものです。

B. 予測を育てるのは、用途による教育。

生活力は、まわりの世界との予想による交渉能力です。用途による教育は、理論的教育とは違って、予測をいつも前提としています。例えば、形は同じでも、折り畳みナイフではパンを切れません。大きな普通の包丁のようにはいきませぬ。ちぎらなければならないのです。ものの同一性を評価するのは概念ですが、それらの相互関係、用途について評価できれば、観念になります。

C. 1対2対4の配列、二つに分ける力。

同じものをいろんなふうに見立てる。これが子どもの特権です。単純でもあり、複雑でもあるレンガの配列。すべての面が長方形で、長さは幅の二倍、幅は厚さの二倍。これであらゆるものが建造できます。子どもは、一つだけでは、模倣しませんでした。二つにすると、かれらは組み立てました。例えば、横になった積み木の上に、垂直に置くとか。読むことのできる5人の生徒は、4、5個からなる複雑な組み合わせも、一回で模倣しました。

D. 斜線に潜む基底線、対角線的な比較。

斜線は、完全な比較を実現します。斜線は、傾斜により垂線の性質を、方向により水平線の性質を帯びています。斜線は、実際の線、あるいは虚構の線との関係でしか斜線でないがゆえに、観念の入り口です。斜線を引くときの目配りは、物自体に内在した関係を理解するには欠かせません。

E. 拍節による変換は、頭の回路を作る。

読み方は、文字を読みに変換すること、組み合わせを音節として発音すること、これらの使用によってしか征服することができません。例えば、cra-vate(クラ・バット、ネクタイ)に対し、ある子は、ta-va → ta-va-te → gra-va → kra-va、keと発音します。読みの練習により、拍節としての連続発音が強化され、聞き・話し・思考する韻律回路が形成されます。

F. 二人でいくつ、頭で描けば抽象世界。

具体的概念をもたない人に、抽象を教えることはできません。つるはしを手にしたように、かれらに数字を触知させました。かれらはまず、三つと四つのまとまりを混同しました。量として頭に描けないのです。二つと二つで幾つ。これを思い描けるかが、抽象への出発点だと思えます。